

本学の取組み報告

「自己点検評価の学生参画の在り方について」

鈴木 将史

創価大学 副学長

本学は自己点検・評価において学生参画というものを進めているわけですが、その現状、また課題、そして今後の取り組みといったことについて話をさせていただきます。今年、2021年度に創価大学は第3期の認証評価を大学基準協会から受けまして、それに合わせましてさまざまな自己点検・評価についての見直しを図りました。先ほど馬場学長から、開学以来の伝統という話がありましたけれども、本日もその開学以来の伝統の話、それから現在の自己点検・評価活動、そしてまたその後、様々な観点から学生に対して行っていることについてお話をさせていただきます。この学生第一の伝統、設立構想から全学協議会へという点について、日時も含めて、少し詳しくお話をさせていただきますと思います。

本日の内容

1. 創価大学における「学生第一」の伝統
2. 本学の自己点検・評価活動における学生参画
3. 2021年7月7日学生研修
4. これからの方向性

1. 創価大学における「学生第一」の伝統

まず1969年5月3日、創立者池田先生が「建学の精神」を含む様々な構想というものを発表されました。その中で、「教授は、たとえ無名であっても、青年のように旺盛な研究意欲をもち、教育に生命をかけて取り組んでいく人をもって構成する」という言葉、またその後の教授と学生との関係というところでも、「相互に対峙する関係ではなく、ともに学問の道を歩む同志」「あえていえば、先輩と後輩といった、あくまでも民主的な関係でなければならない」というお話と共に、最後には「学内の運営に関しても、学生参加の原則を確認し、理想的な学園共同体にしていきたい」というようなことが語られています。

また、有名な第3回入学式の、「創造的人間たれ」という入学者に対する講演でも、「言う

創価大学設立構想

- 1969年5月3日、創立者池田大作先生が「建学の精神」を含む諸構想を発表

「教授は、たとえ無名であっても、青年のように旺盛な研究意欲をもち、教育に生命をかけて取り組んでいく人をもって構成するということでありす。」

（教授と学生との関係）「相互に対峙する関係ではなく、ともに学問の道を歩む同志」「あえていえば、先輩と後輩といった、あくまでも民主的な関係でなければならない」

「学内の運営に関しても、学生参加の原則を確認し、理想的な学園共同体にしていきたい」

までもなく、創価大学は、皆さんの大学であります。同時に、それは、社会から隔離された象牙の塔ではなく、新しい歴史を開く、限りない未来性をはらんだ、人類の希望の塔でなくてはならない」という言葉、また「私立大学とは、自主的な大学のことであり、いわば皆でつくる大学」であるとか、「この創価大学を自分たちでつくり、自分たちで完成していく大学であるという認識をもっていただきたい」、また「創価大学に現に属する人々、また将来、志を同じくして加わってくるであろう人々の全員が、一つの生命体となってこそ、その開花をもたらすことが可能となる」、こういったことが語られています。これらの資料はすべて、先ごろ刊行されました『創価大学50年の歴史』に詳しく載っております。

先ほど学長が触れました全学協議会というのが本学の大きな特徴ですけれども、1972年の10月にまず理事会から学費の値上げというものが通知されました。ところがそれは先ほど読んだ創立者の精神に反しているのではないかということで、学生が全学集会を行いました。その結果、すぐに理事会が学費値上げを白紙撤回しました。さらに全学協議会の設置を提案したということが『50年の歴史』に書かれています。その流れの中で、学生たちが全学協議会設置を決議し、そして1974年4月2日に全学協議会が発足したということで、今から47年前ということになります。開学3年目です。その後どうなったかということ、学生たちが全学協議会等を経て話し合った結果、やはり学費は値上げせざるを得ないのではないかということで、学生たちが決議することによって、1976年度から学費の改定が行われました。創立間もない創価大学において、このような学生自治の姿、全学協議会を中心として改革が行われたということが記録されています。

当時大学紛争も華やかな頃でしたので、今よりも学生たちがこういう自治に目覚めていたのかもしれませんが、創価大学というのは、はじ

めからこのように学生第一で、学生と教員、職員が一体となって進めていく、そういう姿をしていたということが、歴史的にも明らかになっています。

全学協議会、これは現在の規則ですけれども、2行目にありますように、本学は開学の当初から、「学生参加の原則」による「理想的な学園共同体」を目指していました。これは先ほどの言葉にあった表現です。下の第6条にもあるように、学生部会16名以内、院生部会3名以内、その他理事会、教員、職員という構成で、現在も全学協議会が2か月に1度行なわれています。

2. 本学の自己点検・評価活動における学生参画

認証評価に向けて、本学の自己点検・評価活動における現在の学生の参画はどうなっているのかということについてお話しします。まず「創価大学内部質保証ポリシー」というものが2013年に制定され、今年度改正をいたしました。その6番目のところに「『学生中心の大学』を標榜する大学として、内部質保証推進のための学生の意見聴取に努める」と明確に書かれています。また「内部質保証推進体制及び手続きに関する規程」、ここにも「自己点検・評価の実施」のところ（第5条）、自己点検・評価は形としては自己点検・評価委員会によって行われるわけですけれども、その3番目に、「自己点検・評価を実施する組織は、積極的に学生の意見を取り入れることに努める」と書かれています。これに従いまして、自己点検・評価委員会には各学部、研究会に分科会がありますが、その分科会ごとにそれぞれの特質に合わせて、学生達と共に評価を行っているということで、現状もそうなっていると思います。それから「自己点検・評価実施規程」のところにも、各学部評価分科会とか、学士課程教育機構評価分科会がありますが、それぞれの中の委員会の構成として第5条の4のところ、「委員会およ

び分科会は、学生の代表を構成員とすることができる」ということになっています。

このような規程、ポリシーにもとづき本学では、学生参加のもと自己点検・評価というものを進めました。その結果として、これは認証評価用の点検評価報告書の中での表現ですが、それでも、「内部質保証への学生参加」というのが明示されています。赤字のところにありますように、「2019年度から各学部・研究科の評価分科会や全学自己点検・評価委員会に学生が参加し、意見交換の場を設けている」。さらに全学協議会とか学友会代議員会、学生寮の連絡協議会など、様々な学部・研究科以外の組織についても、大学執行部との色々な打ち合わせ、話し合いを行っているということが書かれています。

自己点検・評価の過程の中ですが、その真ん中に8月に行われた第2回全学自己点検・評価委員会において学生へのアンケート結果が報告されたとか、最終的な点検評価の結果は2021年3月に開催した、全学自己点検・評価委員会に提出されたなどと書かれています。自己点検評価委員会は年に3回行っています。この3回目の3月のところに、学生組織からの検討結果が提出されました。資料aと書いてありますが少しお見せします。これが今年3月に行われた、学生自治会からの最終報告です。この黄色のところ、あとで次のスライドでまとめてお話ししますが、このように「大学が学生の声をどう聞いているのか」、あるいは「各学部においてチャンスがあるか」というようなことについてアンケートを取りまして、「その頻度は適切であるかどうか」については、概ね「はい」が4分の3くらいですね。それから「打ち合わせに出席する教職員も適切であるか」については、概ね「はい」です。その他各学部、あるいは学生組織ごとにさまざまな意見が述べられています。ということで元に戻ります。

今の報告をまとめますと、この度全学自己点検・評価委員会において、「学生委員として学

生が大学に声を上げる仕組みが取り入れられているのか」という視点で点検評価したということで、先ほどのような表とかグラフがありました。そのあとに自由な意見がいろいろと書かれていたのですが、かいつまんで少し紹介しますと、「大学側が学生に意見を求め、自治会との会議をセッティングしてくれる等、学生主体が体现されていると大変感じている」とか、「今年はコロナ禍により各組織で教職学の連携をすることが多かったが、組織全般的に学長、理事長との懇談を要望する意見が多いので、今後懇談の機会を設けていただければ幸いです」とか、「ただ発言することに少しハードルの高さを感じた」というようなことが書かれていました。そういう認証評価の結果を受けて、今後どのようにしていったらいいのかということを考えまして、実は今年の7月に、学生研修を行いました。

3. 2021年7月7日学生研修

自己点検・評価報告書を作成したわけですが、その中で、やはり学生第一、教職学一体の伝統というものは、全学協議会などによって今もしっかりと息づいているということは確認されました。又、自己点検・評価活動への学生参加が進んでいて、これが本学の強みであると報告書にも書かれています。しかし厳しく見れば、学生による報告は先ほどのようにかなり簡潔なもので、限定的な内容にとどまっております。内部質保証推進体制、いわゆるPDCAサイクルなどにおいて、学生参画によって何か改善したと呼べるほどの取り組みには、まだなっていないというのが現状であると認識いたしました。真の意味で、学生参画による教学の改善を実現するためには一体何が足りないのかということを考えてみると、学長からのアドバイスもあったのですが、やはり学位授与方針、ディプロマ・ポリシーをはじめとする3ポリシーを軸とした教学マネジメント指針というもの

が学生に十分共有されていないのではないかと、これを共有しないと、共通の土俵に立って大学の教学についての改善を図るということが出来ないのではないかとということで、7月7日に学生参加型「教育の質保証」研修会というものを行いました。

そこでは創価大学の教育目標、人材育成方針、ディプロマ・ポリシー等を資料としてお配りしまして、カリキュラム・ポリシーとかアドミッション・ポリシーも配った上で、各学部にはそれぞれの3ポリシー、またラーニング・アウトカムズがあります。そうしたものをワークショップ的に各学部で検討して、これまですでに認知していたかどうかとか、改めて読んでみてどうかとか、そのようなことを考える場にいたしました。その場では学長から教学マネジメント指針というものを、1、2、3と図を通して話をしていただき、私からも3ポリシーの位置付けについて改めてお話をさせていただきました。学生さん達にそういうものが大学にはきちんと存在していて、大学はそういう方針できちっと教学を行っているのだということを改めて認識してもらいました。「研修後のアンケート」というのが資料bにありますが、アンケートを取りまして、学生たちの正直な認識の度合いというものを聞いてみました。当日はここにありますように、38人が参加して、32人が回答しました。これは学生一般、誰でも参加して良いというのではなくて、各学部で自己点検・評価に関わっている、あるいは自治会活動に関

わっている学生の代表に参加してもらい、代表から動きを広めていくということを狙いとしてしました。限られた人数ですが非常に意欲的な学生が集まりました。しかし、アンケートを取ると、研修会参加前の大学・学部・研究科の教育目標、3つのポリシー、ラーニング・アウトカムズの認知をしていたかということ、「知っていた」というのがこの6.3%。「一部知っていた」が43.8%、一方で「聞いたことがある程度」、「知らなかった」といってほとんど認知していないという学生が半分ぐらいです。意欲的な学生の中でもこういった程度の認識であったということが明らかになりました。また、科目とラーニング・アウトカムズの関係です。それぞれ授業を受けている科目がラーニング・アウトカムズとどう関係しているのか、ディプロマ・ポリシーをどう実現しているのかというものを履修時に意識しているかということ、このような具合で、半分ぐらいは「あまり意識していなかった」、「まったく意識していなかった」ということで、意欲的な学生であってもこのような感じであったということでした。そういうことが分かりまして、学生の感想としては「ラーニング・アウトカムズと授業の関係性を知る良い機会でした」、あるいは「身近な友人や自身が所属する学生自治会で話していくことが大事だと感じました」、また「内部質保証においても学生参加を体現して行く必要があると思いました」「学生自治会としても、このようなことに特化したイベントを開催するなど取り組んでいきたいです」等がありました。また、授業を受ける姿勢においても、「授業に対する向き合い方や履修の取り方に取り入れていくことができると思いました」「ラーニング・アウトカムズは僕が苦手としている分野を意識しながらこれから残りの創大生活を過ごしていきたい」ということで、一定の理解を得るとともに、今まであまり認識していなかった3ポリシー、ラーニング・アウトカムズというものを、学生さんたちにも重要視してもらいたい機会に

学生の感想

- ・ラーニングアウトカムズと授業の関係性を知る良い機会でした。
- ・とても貴重な機会に参加させていただき、誠にありがとうございました。今回学んだことを自分だけでなく、身近な友人や自身が所属する学生自治会で話していくことが大事だと感じました。組織としても学期終わりのアンケート等で本音の声を聞いていきたいと思いました。
- ・このような内部質保証においても学生参加を体現していく必要があると思いました。学生自治会としてもこのようなことに特化したイベントを開催するなど取り組んでいきたいです。
- ・今回の研修会でポリシーやラーニング・アウトカムズの内容を知れたことでこれからの授業に対する向き合い方や履修の取り方に取り入れていくことができると思いました。ラーニング・アウトカムズの僕が苦手としている分野を意識しながらこれから残りの創大生活を過ごしていきたいと思えます。

なったのではないかと思います。また彼らは自治会に所属している中心となる学生が主ですので、そういう学生達からは是非ほかの学生たちにも広めてほしいと思いますし、また教員組織でも様々なガイダンスなどを通して、今よりも3ポリシーとかラーニング・アウトカムズ的位置付けというものをきちんと周知徹底していくことが必要である、そういったことが認識できる研修会になりました。

4. これからの方向性

これからの方向性ということになりますが、学生の声を反映した大学運営、3ポリシーの見直しに、これから取り組もうと考えています。学生参画への今後の取り組みといたしまして、まず先ほどから申し上げていますように、やはり共通の土台である教学マネジメント指針、3ポリシーというものを共有すること、つまり全学生が大学、学部の教学に関することをきちんと認識、理解する。それを認識、理解するだけでなく、自分が授業を受ける際にもそういったことを意識しながら自らの力をつけていってもらうということが必要だろうと思います。その上で大学の教学のあり方について学生と共に共通の土俵に立って見直しを加えることがその後可能になると思います。又、3ポリシーの見直しということにも今着手しています。

自己点検・評価に参画している学生にアンケートを実施しました。資料を少しお見せしま

学生参画への今後の取組み
【3ポリシーの共有】 <ul style="list-style-type: none">• 全学生が大学・学部の教学に関する方針をきちんと認識・理解できるようにする• その上で大学の教学の在り方について学生とともに見直しを加える
【3ポリシーの見直し】 <ul style="list-style-type: none">• 自己点検・評価に参加している学生にアンケートを実施→資料c• 3ポリシーを現在よりわかりやすくするように見直し中
【各分科会での学生参加】 <ul style="list-style-type: none">• 学部・研究会ごとの教学指針をめぐって、授業を受ける側である学生の声を聴く• 学部・研究科全体でPDCAサイクルに取り組み、学生をその主体者とする
【建学の精神に立ち返る】 <ul style="list-style-type: none">• 認証評価や世界・日本のトレンドなどは別に、本学の建学の精神に立ち返って学生一体の大学建設を目指すことが重要

す。優秀な、意識のある学生でも、次のような結果になりました。「創価大学の教育目標についてわかりやすさを5段階で評価してください」ということで、「大体わかりやすい」という人が多いですが、「分かりにくい」という人はそんなにいない。けれども、本学ならではの部分はどこかと聞くと、一番多いのはこの「創造的人間」というところです。一方で、分かりづらいと思う部分はどこかと聞くと、これもまた「創造的人間」という答えが出てくるような具合です。また、ディプロマ・ポリシーでも、分かりづらいと思う部分は何かというところ、「統合力」という言葉が分かりづらい等、簡単なアンケートですが浮かび上がってきました。そのようなことを通しまして、3ポリシーの見直しをこういったアンケートなどをもとにして、現在もっとわかりやすくするように見直しを行なっているところです。また各分科会、学部・研究科ごとの教学指針は、より学問分野に即した形になっていますので、それらについても学生と対話しながら、授業を受ける側である学生の声、今よりも深く聞いていきたい。その上で、学部・研究科全体で自己点検・評価をめぐってPDCAサイクルに取り組んで、その学生が主体者となっていくように育てていきたいと思っています。

最後に、認証評価とか自己点検・評価というのはどちらかというとなんとなくやらされている感があります。これから沖先生に詳しく学問的背景に基づいてお話をさせていただきますが、この「学生参画」もなんとなく全体的なトレンド、流れという認識があるかと思っています。しかし、そういうことは別に、本学が建学の時代から学生中心の大学だったということに立ち返れば、学生一体の大学建設を目指すということは、本学にとってもより重要なことでもありますし、そのことを思い出しつつ、これが本来最も重要なことであったと思って、この学生参画を今後も進めていきたいと思っています。以上、ありがとうございました。